広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	遠藤周作『スキャンダル』における勝呂の人物像 : 運命・実存・救いの所在
Author(s)	倪, 楽飛
Citation	近代文学試論 , 59 : 57 - 68
Issue Date	2021-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/53451
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00053451
Right	
Relation	

遠藤周作『スキャンダル』における勝呂の人物像

― 運命・実存・救いの所在 ―

倪　楽　飛

はじめに

本論は、遠藤周作文学における最大の問題作『スキャンダル』（新潮社、一九八六年）の主人公であるクリスチャン作家勝呂を、ヴィクトール・フランクルが確立したロゴセラピー＝実存分析の視点から考察するものである。本論は拙論「遠藤周作『スキャンダル』論―実存分析の視点から見る勝呂の心理・精神状態―」[1]の後篇に当たる。

勝呂の「内面」と「外面」の葛藤に注目するこれまでの先行研究と異なり、前篇では、勝呂の〈精神次元〉に焦点を当て、「クリスチャン作家」と「いい夫」のイメージの本質を改めて考察し、それは単に勝呂が「立派な自己」を演じるために作った「仮面」ではなく、他者に対する責任や使命（意味）に対する意志が内包された、勝呂の魂の姿を示している真実の顔なのであると論証した。「贋者の男」の出現が意味するのは、長い間勝呂の無意識に抑圧されていた欲望・本能が「仮面」を砕いて、勝呂のもう一つの人格として外に顕現することではなく、普遍的に人間の魂の領域に潜む〈ネクロフィリア的な傾向＝悪の衝動〉が意識化され、更に強迫観念になって、勝呂の実生活に支障を来す、ということなのである。最終的に、勝呂の〈強迫神経症〉的な状況を引き起こしたのが、彼自身の〈過剰自己観察〉という不健康な態度であることを指摘し、その救いの可能性が〈自己〉から注意を逸らし、他者に目を向けるようになることにある、と結論付けた。

本論では、認知の側面から、〈悪〉が如何に強迫観念となって、勝呂を支配するようになったのかを分析する。それによって、人生の頂点に達したクリスチャン作家勝呂がなぜ急に〈過剰自己観察〉をして、〈強迫神経症〉的な状況に陥ったのかを明らかにする。最後に、実存分析を用いて、彼が如何にして救いを獲得したのかを考察したい。

一、〈悪〉の〈運命化〉（疎外化）

1、認識の問題

単刀直入に言って、勝呂の意識に〈ネクロフィリア＝悪〉の「種」を撒いたのは成瀬夫人と東野先生である。無論、彼らは意識的にそうしたのではなく、むしろ勝呂自身が無意識的でありながら、能動的に彼らの言動からその「種」を受け入れたのである。しかし、〈悪〉に関する彼らの考えや話には、確かに侵入的なものが感じられる。

まずは中華料理店で一緒に食事をとる時の勝呂と成瀬夫人との会話

に注目したい。料理をおいしく食べている成瀬夫人を眺め、勝呂は彼女の仕草に「エロチックで」「性的な行為を思わせ」るものを感じる。また、「箸を動かす時や盃を口に運ぶ時のながい指の動きには蜘蛛が餌食に糸をまくような滑らかさがある」という描写は明らかに、成瀬夫人に「悪」の網の中心に引きずられる勝呂の予感を暗示している。それが「病院でのあなたから連想できない」表情だと言った勝呂に、成瀬は「それは当然でしょう。どんな人間だって一つの姿や一つの顔ではありませんもの」と答える。おそらく成瀬の言葉から糸井素子に描かれた肖像画を連想したのかもしれないが、勝呂はまた、「じゃああなたは別の姿や別の人格がおありなのですか」と訊く。「先生は」と成瀬に反問されて、勝呂は自分にはそれがあると認め、「でなければ、小説は書けません」（六三〜六四頁）と答える。

よく見ていくと、勝呂の言葉には人間存在に関する認識的な落とし穴があることに気付く。まず、「別の姿」と「別の人格」を混同しているのは「表現」と「内容」を同一視する過ちであろう。人は性格が変わることがあり、場合によっては幾つかの性格が備わっているように見える可能性もあるが、人格そのものが変わったり分割されたりすることはあり得ない。かつて「人格分裂」[2]か「多重人格」と呼ばれた精神障害が解離性同一性障害と改称されたのは、まさに人格が分裂不可能という認識が精神医学の一般常識になったためである。[3]

ここでの勝呂の言葉は成瀬夫人を引き付けるためのレトリックに過ぎないかもしれないが、自分には「別の人格」があると認めることは、自分の「不誠実」を許容することになり、また責任を放棄することにもつながる、ということを見逃すわけにはいかない。「別の人格」があるから、何か悪いことをしたとしても、別に自分の「核」となる「主要人格」とは関係ない、というような思考回路がそこで形成されるからである。このような考え方は、まさに「悪の人格」が顕現するための裏口を開けたままにしておくことになるのではないだろうか。

これが成瀬夫人の話が勝呂に及ぼした最初の影響である。その後、東野先生の話を通して、〈ネクロフィリア的な傾向〉と名付けられた〈悪〉はエーリッヒ・フロムの理論の形で勝呂に意識化される。講演会の前、東野は次のように、フロムの理論を勝呂に紹介する。

「フロムという学者がですね、人間を二つの型に別けていましてね。本質的に人生に建設的な統一や調和を好む作家がいますね。たとえば武者小路がそう。山本有三もそうです。外国じゃゲーテもその一人です。こういう型の作家をフロムはバイフォリア型とよんでいるのです。」〔…〕「ところが建設的な未来より、暗いものや過去に執着したり、自殺傾向のあるタイプの作家もいますね。太宰治なんかそう言えるんじゃないですか。こういう型をネクロフィリア型とよぶんです」（九四頁）

一見ではフロムの理論に見えるが、「本質的」、「タイプ」、及び「人間を二つの型に分けてい」るなどという表現に本質主義的な色合いがあるのも事実であろう。就中「バイフォリア型」と「ネクロフィリア型」で具体的な作家を定義付けるという東野の説明は、さらにフロムの理論に本質主義的なニュアンスを付けたと思われる。その結果、勝呂も「破滅型」という「文壇用語」で東野の解釈を反復し、その概念を自ら

の認知体系に織り込んだのである。[4] しかし、『悪について』[5]におけるフロム自身の解釈を確認してみると、〈ネクロフィリア〉と〈バイフォリア〉が人間の本質を決定するものではないことがわかる。フロムは、「ネクロフィリア的な人」や「バイフォリア的な人」という表現を使ってはいるものの、〈バイフォリア〉も〈ネクロフィリア〉も人間の本質をなす実体的なものではないことを強調している。[6] 実際、フロムは「善」（バイフォリア）が人間の存在を「私たちの本質へと限りなく近づけるものであ」るのに対して、「悪」（ネクロフィリア）が「存在と本質をどんどん引き離していくものである」と述べ、人間の本質は「善でも悪でもなければ愛でも憎しみでもなく」、身体でありながら精神であるという事実に追い詰められ、常に解決を強く求めている矛盾・葛藤そのものである、[7] という非常に実存哲学的な結論を出している。[8] 要するに、「純粋なネクロフィリアは狂気であり、純粋なバイフォリアは聖人である。ほとんどの人はネクロフィリアとバイフォリアが混ざり合っている」[9]というフロムの言葉が示したように、〈バイフォリア〉と〈ネクロフィリア〉は、人が自分がどのような人間になるかを決めるときに、方向を提示する「可能性」に過ぎないのである。人にはいつでも別の方向を選ぶ自由が備わっているし、ある人の本質を決めるのはその人がその都度行った選択・決断であり、その人の〈実存〉そのものなのだ。

それと比べて、勝呂の考えはどうなっているだろうか。講演の中で、彼は次のように述べている。

「何よりも人間を描くこと」と勝呂は暗誦した台詞を唱えるように口だけでしゃべった。「それが作家である者の第一の目的です。何よりも人間の奥の奥まで探ること、それが作家である者の絶対的な義務だと思います。〔…〕少くとも私は今日まで自分の宗教のために作中人物の人間性を美化したことはありません。おぞましいものは、おぞましいものとして直視してきた……」〔…〕男は出入口のそばに立って、更にいつかと同じ嗤いをうかべた。

（嘘をついているな、お前は……）〔…〕（お前は人間のおぞましいものを直視などしているものか。読者がお前に抱いているイメージを損ねぬように小心翼々と書いてきたじゃないか。ちょうどお前が女房にそうしたように）（九七～九八頁）

ここで注目すべきなのは、勝呂が「人間の中の本当のおぞましいものを直視して」いないから、彼が描いたものも、読者が抱いている彼のイメージも、良い夫という姿も全て「嘘」にほかならない、という分身たる男の考え方である。その考え方に即して言えば、「人間性を美化したことがありません」という勝呂の反論も所詮嘘に過ぎないのである。何故なら、人間の中には〈悪〉が存在し、本当の人間性を描くなら、〈罪〉よりもっといやらしくて醜いものを描かなくてはいけないし、人間の本当の顔を描くなら、〈ネクロフィリア＝悪〉の色合いがなければならないからである。これが分身たる男、というよりもむしろ勝呂自身の本質主義的な理屈なのではあるまいか。少なくとも、〈ネクロフィリア〉は人間の本質の一つであるという考えに、今の勝呂が捕われていることは推測できよう。今の彼は、糸井素子が描いた醜悪な顔が本当に自分の本質を表していると信じるのかもしれない。

2、偶像化の問題

また成瀬夫人に戻る。彼女は自分の愛読書のジル・ド・レの伝記を勝呂に送る。同封した手紙に、ポーの『黒猫』の主人公の言葉を引用しながら激情・背徳への慾望について次のように書いている。

激情はどうして起きるのでしょう。激情はどうしてあれほどの快感を味わわせるのでしょう。わたくしは道徳では抑えきれぬ、説明できぬ、すさまじい力がかくれているような気がして、この本を読みました〔…〕背徳の慾望とはどんな人間の心にもある原始的な衝動の一つだ。〔…〕してはならぬと思うからこそかえってその行為を犯すという経験は誰でも持っています。どんなに判断力を持っていても、それが守らねばならぬ法であるという、それだけの理由でこれを犯したくなる慾望は誰でも持っているのではないでしょうか。この背徳の慾望に私は最終的に屈服したのです。私を駆りたてたのは、過ちのために過ちを犯したいという慾望でした（一三一頁）

明らかに、成瀬の言う「激情」は背徳・犯罪につながる〈ネクロフィリア〉的なものである。「背徳の慾望」をまるで自分の運命を決めるものであるかのように説明している成瀬夫人の手紙は、一方ではドストエフスキーやボイスらの言葉が援引され、知性に満ち溢れている。勝呂はその手紙にほぼ完全に魅了されたとも言えよう。その時、彼は壁に飾っている「あなたの作品を通して、主はあなたを祝福なさいます」というマザー・テレサが彼のために書いてくれた言葉を瞥見した。しかし、彼はもはや自分が祝福を受けていることを信じなくなり、成瀬夫人のいう〈ネクロフィリア〉的な「激情の力」が自分の中にもあり、自分がそれに支配されていることを信じるようになった。彼は自分に――マザー・テレサの言葉を通して彼に語りかける神様に――次のように言う。「私は小説家です。人間の心の奥底に手を入れねばならぬ小説家です。その心の奥底に神が祝福したまわぬものがあってもやはり手を入れねばならぬ小説家です」、と（一三二頁）。

勝呂が自分に言い聞かせたこの言葉は、元々小説家の責任感に基づいたものであったに違いなかろう。[10] しかし今の勝呂にとって、その言葉は変質してしまった。その言葉は、彼によって三回も反復された「小説家」というアイデンティティー、すなわちもう一つの〈本質〉で自分の当面の心理・精神状態を正当化する言い訳になっているのである。

小説家、或いは真の学問者は、確かに教義上の真理に背くことも惜しまずに、勇敢に暗闇に潜って、その中に潜む根源的な真実を探求せざるを得ないという「危険な覚悟」[11]を持つべきである。だがそれと同時に、その「覚悟」に自由を奪われないように注意しなければならない。ところが、「神が祝福したまわぬもの」、即ち〈ネクロフィリア＝悪〉まで「手を入れねばならぬ」という考えに、今の勝呂はあまりにも執着しすぎて、それを実行する絶対性と完全性を得ようとしているのである。〈「なにか胡散臭い」と批判されたのは「悪」に直面していないからだ。「悪」を書いていない私の文学は嘘にすぎないのだ。それどころか、「自分の今日までの人生がすべて虚偽の上になりたっている」（一二一頁）気さえした〉。だから自分の中にもあるはずの〈ネクロフィリア的〉なものを全部掘り出して、徹底的に〈悪の問題〉を解決すべきだ。そうし

なければ、自分は所詮成瀬夫人が言ったような「最後の最後まで書きにならない人」、「逃げる人」（一三六頁）にすぎない不完全且つ偽善的な小説家になってしまうのだ。裏返せば、「人間性の真実」を書く「真の」小説家だからこそ、神の光も及ばぬところに手を伸ばす「権利」を完全に行使すべきだ、という思考回路が勝呂の執着に仄めかされているとも言えよう。その「権利」を「小説家」である彼に与えたのは――より正確的に言えば、彼にその「権利」を全面的に実行させようとしているのは――まさに、〈悪〉の「実在」、「実在的」な〈悪〉であったと言っても差し支えなかろう。

前篇では、勝呂が必ずしも〈強迫神経症〉を患っているというわけではないが、彼には〈強迫神経症〉的な徴候が見られるのは事実であると指摘した。ただの徴候なのか本当に〈神経症〉になったのかはさておき、〈強迫神経症〉の本質を、患者が自ら作った強迫観念に支配されてしまう状態になっていると考えることができる。フランクルは強迫神経症者について次のように述べている。

> 彼は一〇〇パーセント確実な認識と一〇〇パーセント有効な決意を求めるという点において、彼の心は一〇〇パーセントということへのファウスト的な欲求でみたされている。つまり彼は「汝ら神の如くになりて、善悪を知るに至る」という蛇の甘言にのせられたのだ。〔…〕事実、強迫神経症者の不遜さは、被造物であるという彼の定めを無視しようとすることにある。[12]

このように見て、勝呂は〈ネクロフィリア的な傾向＝悪の衝動〉を意識化しただけでなく、さらに〈ネクロフィリア的な傾向〉を〈ネクロフィリア〉という運命として「本質化」ないしは「悪魔（ファウスト）」そのものとして〈実在化〉までしたのだ、と考えられよう。これこそ今の勝呂に見られる〈神経症的〉なところなのだ。フランクルの言葉を借りて言えば、今の勝呂は「神経症的な宿命論」[13]に陥っているのである。そして、実在化された〈悪〉は、勝呂が今まで築いてきた文学世界に対して、または読者にとっての「クリスチャン作家勝呂」、妻にとっての「良い夫」、彼の作品に導かれてクリスチャンになった青年にとっての「師」など、勝呂にとってのすべての既成事実と将来の可能性に対して、「偽善であり、無価値だ」という壊滅的な判決を下し、勝呂を囚徒にしようとしているのである。逆に言えば、自分が〈ネクロフィリア〉という根本的な本質に支配される人間にほかならないという思い込み（迷信）で、勝呂は自ら〈悪〉の偶像を作って、「神の国」に行く人間になる自由を、責任を負う自分の人格を生贄に、その偶像に捧げようとしている、ということなのだ。ここの「偶像」とは、崇拝する対象ではなく、人の言動や思考を凌駕して、人を支配する存在を意味するものである。このような意味で、勝呂の身に起こっていることは要するに、〈ネクロフィリア＝悪〉の〈運命化〉、〈悪〉の〈疎外〉[14]なのだ、と言っても過言ではなかろう。

〈ネクロフィリア的な傾向〉はあくまで人の可能性にすぎないのにもかかわらず、成瀬夫人や糸井素子、そして今の勝呂は、それを自分の運命を決めるようなもの、運命的なもの、運命そのものとすら考え、〈悪〉の可能性を〈悪〉の必然性として信じ込んでしまっているのである。〈運命だから仕方がない、運命だからそれに負けてしまうのも当然だ。責任は自分自身にあるのではなく、運命にあるものだ。〉そう思う

のは悔しいかもしれないが、楽にはなる。その思い込みにつれられて、ひたすら「激情の力」に身を任せ、何も考えずに快感を味わいながら悪の深淵に落ちていけばいい。しかし、その快感とは、〈人間性〉を破壊し、「人間らしい人間」になることを諦めることによる快感であり、キリスト教的に言えば、悪魔が人を神に背かせるために仕掛けた甘い誘惑なのではないだろうか。

二、勝呂の〈実存的危機〉

以上の分析を通じて、東野先生や成瀬夫人が勝呂の認識に撒いた「種」は即ち〈ネクロフィリア＝悪〉及び人間存在に対する本質主義的な考え方である、ということは明白になった。勝呂はそのような考え方を受け入れ、信じ込んだだけでなく、常にその考え方が示す方向から自分の人生を顧み、自分の人間性を否定しようとする。

しかし、勝呂はなぜ〈悪〉の偶像を作ってまで、自分の心理・精神状態を正当化しなければならないのだろうか。この点は、本作に託されたもう一つのテーマ、「老いの問題」と結び付けて考えてみれば明らかになると思われる。すでに人生の晩秋に入った勝呂は、自分の老衰した体を感じ、鏡に映す自分の老醜の顔を眺め、死が迫ってくることに苦しめられている。そればかりか、三十数年の苦労や藻掻き、ようやく人生の頂点に立つことができたと思ったら、自分のライフワークにはまだ解決されていない致命的な問題があることに気付いた。〈自分は今までの人生を、小心翼々その問題を避けて、知らないふりをして、あたかも存在しないものかのように自己催眠して生きてきたというのだろうか。それは虚偽、偽善、現実逃避、卑怯なのではないか。〉[15] しかし、その問題、その問題が示してくれる世界にはいったい何の意味があるのだろうか。

> 勝呂は人生の中で無意味なものは何一つないと彼の小説を通して考えてきた。もしその考えが間違っていないならば、いったい何の意味があり、（彼を）何処に連れていくのだろう。霧のなかをうつろいているようで、行くべき方向も帰るべき道筋も今はさっぱりわからなくなった。（一二〇頁）

勝呂は、人生の下り坂を歩んでいかざるを得ない現実を前にして、老いと死に対する恐怖や不安という身体・心理の課題ばかりか、改めて人生の意味に関する究極的な問いに答えなければならないという実存的な課題にも直面している。「無明のなかで死にたくない。人生に、何らかまとまりをつけたい」（一一九頁）。しかし、その課題をこなすには、今の自分では弱すぎて、「愚かな男にすぎず」、「道を迷い、暗き林に迷」ってしまうだけだ（九九頁）。

この時の勝呂は正に〈意味喪失〉という実存的危機に陥ってしまっているのであろう。実存的危機を乗り越えるには、〈精神の反抗力〉（後述）が必要不可欠である。しかし、次第に〈過剰自己観察〉の渦巻きに吸い込まれていく勝呂は、自分を取り巻く状況から距離を置き、冷静に自分の人生を吟味することができなくなり、本当の意味への意志を奮い起こす人格の力を失ったのである。勝呂は、自分の弱さ、自分の無力さを正当化してくれるもの、〈意味喪失〉という実存的危機に挑む重荷

を卸してくれるようなものを必要として、〈ネクロフィリア＝悪〉を偶像化したのである。だが、その「偶像」は、意味を否定し、人間性を矮小化し、人格を養分として食いつぶし、増々膨らんでさらに人間を奴隷にする「虚無」にすぎないのだ。そして今、その「虚無」の力を加担し、勝呂を飲み込んで自分自身の一部にしようとしているのは、まさに「分身たる男」なのである。

明らかに、勝呂に見られる〈強迫神経症〉的な状態を、フランクルが定義した「精神因性神経症」[16]で解釈することは十分にありうるだろう。元々〈ネクロフィリア＝悪〉は可能性としての存在に過ぎない。確かに、その可能性を、人間の生来の性質の一つとして人間存在に条件を付けるという一種の事実と見なすこともできるが、それは決して人間の唯一の性質でもなければ、絶対的な条件を付ける事実でもない。〈ネクロフィリア＝悪〉は人間の本質であるという考え方は、相対的な条件や部分的な事実で人間存在の真実を規定する〈還元主義〉につながるものである。そのような〈還元主義〉は結局のところ、人間の自由を否定し、人格の尊厳を抹殺し、人生の意味を嘲るニヒリズムに至るだけなのである。

では、結局、勝呂は如何にして実存的危機を乗り越えるべきなのか。彼は如何にして「醜悪世界」から脱却することができるだろうか。次章では引き続き〈実存〉の視点から勝呂の救いの可能性を考察する。

三、実存的人間

これまでの分析を踏まえてみれば、勝呂の「贋者」の正体はさらに明らかになってくる。実存的危機をもたらした「老いの問題」のほかに、勝呂が直面しているもう一つの問題は、〈悪〉に対する本質主義的な認識に誘発された不健康な心理・精神状態にある。「老いの問題」の実質は望ましくない客観的状況なので、人はそれを「解決する」のではなく、〈精神の反抗力〉で乗り越えなければならないのである。そして、〈精神の反抗力〉を奮い起こす可能性は、勝呂自身にある不健康な状態の問題を解決することにかかっている。さらに、二つ目の問題を二つの側面に分けて考えることができる。一つは〈悪〉に関する認識上の誤謬であり、もう一つは〈悪〉の〈強迫観念〉による精神障害（強迫症）的な状態である。従って、「贋者」の男は、認識上の過ちと心理上の不健康という二側面を同時に有する問題そのものであり、本質化・運命化された〈悪〉を内容とした〈強迫観念〉を具現化（疎外）したものにほかならない、ということもより明白になった。

以上の分析に従えば、「贋者」を打ち破り、勝呂に救いを与える方法も二つあることは容易に思いつくだろう。それはすなわち誤謬を正すか、あるいは〈強迫観念〉を手放すかのどちらかである。結論から言うと、「誤謬の是正」は本作において直接的に書かれておらず、勝呂は「〈強迫観念〉の手放し」を通して立ち直ったのである。これを詳しく説明する前に、先ず〈精神の反抗力〉とは何かを確認しよう。フランクル研究者の勝田茅生氏はそれをわかりやすく説明している。[17]

> 運命が人間に与えた色々の条件は非常に根強いものですが、そこからまったく逃れられないというわけではありません。精神の自由意志によってこれに反発する力が出てくるからです。これは人

間がもっとも人間らしくなるための能力です。これがないと人間は様々な制約の中で奴隷になって、自分を解放することができないのです。自分を超えようとする人間の精神能力をフランクルは「精神の反抗力（Die Trotzmacht des Geistes）」と呼びました。

フランクル自身は、「人間は、自分の身体的あるいは心理的なあり方を精神的に超越できてはじめて、本当の人間になることができ」ると言い、「私たちは精神の抵抗力（反抗力）を使って、心身に制約された状態あるいは社会的に制約された状態を超えることができ」て、「現在のこの状況に対して、自分がどのような態度を取るか、行動をとるか、どのような気持ちでそれに向かうかということを自分で自由に選択できるの」[18]だと述べている。

「どのような態度を取るか」、どのような「行動をとるか」、また「どのような気持ちで」状況に向き合っていくのかを自分で選択し、自分で決断する。これはすなわち人間の実存なのである。人間の精神の反抗力は「実存する」ことで発揮されうるものであり、人間は自らの〈実存〉を実現することで「本当の人間」として生きるのである。そして、「実存する（エクス・システィーレン）」とは正に「自分自身から出ることであり、自分自身に向き合うこと」なのである。[19]勝呂にとっての「強迫観念の手放し」はつまり、運命化された強迫観念に支配されている自分自身から「脱出（エクス・システィーレン）」[20]し、本当の自由（〈自我〉）を取り戻すことを意味するのではないだろうか。彼にとっての救いの可能性は、彼の〈実存〉の実現にあるのだ。

では、〈実存的危機〉に陥り、精神の力を失いつつある勝呂は如何にして〈実存〉を成し遂げられるのだろうか。この問いを解くカギは他者の存在にあると思われる。フランクルによれば、人が他人のために何かをやることで、本当の自己実現を果たし、人が他者の呼び掛けに応えるときに、本当の自分になるのだ。勝呂にとって、彼に〈悪〉の「甘い誘惑」を囁く東野と成瀬に対置し、彼の良心を呼びかけ、彼の本当の〈自我〉を目覚めさせた「他者」は、森田ミツであろう。

本作のクライマックスで、勝呂は成瀬夫人の誘いでホテルに行き、ついにミツを犯している「贋者」の男と合体して少女の生命力を「吸い取り」、やがて命への渇望が命を破壊する「悪の衝動」にとって代わられ、ミツの頸を絞めようとする。その時に、他者の声が勝呂に聞こえた――「苦しい、先生」、「やめて先生」というミツのかすかな声。その声は「先生、心配いらないよ。わたしが看病するから」という声と重なって勝呂の耳についた。いや、むしろ勝呂の魂の領域にその声が伝わってきたというべきだろう。その声が勝呂の魂の領域に響きわたって（personare）、「激情」の支配下で昏迷している彼の人格（person）[21]を呼び起こしたのである。「気を失った者が息を吹きかえすように」、勝呂は「我にかえった」。素子の描いた肖像画とそっくりの「贋者」の男は「すべるように寝室から姿を消した」（一五三頁）。

よく看過されるディテールかもしれないが、ミツの声に意識が蘇らされ、「抗いがたい」烈しい快楽から自分の人格、自分の人間性を取り戻し、「我に返っ」て、今没頭している行為を止めた勝呂は、『沈黙』（新潮社、一九六六年）のクライマックスで、「穴吊り」にされている百姓たちの呻き声を、そしてさらに「踏むがいい」という神の声を耳にして、踏絵を踏んだロドリゴと同じように、「他者の呼び掛けに応える」

ことで、この瞬間の〈実存〉を成し遂げたのだと考えられよう。ミツの「苦しい、先生」は、この意味においては、「踏むがいい」という言葉と同じような重さを持っているのである。快楽に溺れている時、人は激情・衝動の奴隷にすぎず、他者の声に耳を傾ける時、人は「我にかえり」、本当の〈自我〉となるのである。

もう一方で、間接的ではあるが、「実存の実現」は実は自ら「誤謬の是正」まで果たしたのである。繰り返しになるが、〈ネクロフィリア〉・〈悪〉は可能性としての存在にすぎない。人格の尊さは、常に「可能性」と戦い、どのような可能性を実現するかを自分の意志で決断することができるというところにあるのだ。勝呂は正に、意味や命そのものを破壊する行為をやめることで、「醜悪世界」に堕ちる「運命」の鎖を断ち切り、成瀬夫人の言う「過ちのために過ちを犯したい」「背徳の欲望」に「ノー!」と言ったのではないだろうか。

無論、決断することは決して容易なことではなく、〈実存〉も適当に決断することだけで簡単に実現できるわけではない。だからフランクルは「人間は決断する存在である」というヤスパースの定義に、更に〈責任性〉を付け加え、「人間は常に意味と価値、すなわち責任に向かって決断しなければならない存在である」[22]と主張するのである。

> 人間であるということの最も深い、究極的な意味は〔…〕責任を持っているということなのです。ということはまた同時に、それが単に自由であるということ以上のものであることをも表現していることになると思われます。すなわち、責任ということのうちには人間の自由が「何に対しての」自由であるかということもいっしょに与えられているからです。人間がそれに対して自由であるところのもの、人間がそれに向かって、あるいはそれに反対して決断するところのもの、つまりほかならぬ意味と価値との世界、価値の尺度或いはその軸点、あらゆる価値の段階の頂点、すなわち神が、人間の責任ということの中に同時に与えられているからであります。[23]

なぜ人間は責任が問われるのか。それは「他者」がいるからなのではないか。他人との関係において責任を問うのは即ち倫理であり、神との関係において責任を問うのは即ち宗教であり、自分自身との関係において責任を問うのは即ち良心であろう。フランクルが言うように、人間は根本的なところにおいて関係性的存在なのである。人間は常に「他者」との関係の狭間で決断を要請され、苦悩しながら生きていく「苦悩する存在（ホモ・パティエンス）」[24]なのである。勝呂は、〈ネクロフィリア的な傾向〉が〈ネクロフィリア〉の事実になる寸前、他者に目を向け、他者の声に耳を傾け、快楽より責任を選び、それによって救いのロープを掴めたのだ。混沌とした衝動から「自分を救ったものは何か」を勝呂は無意識的にも知っているはずである。それは、目の前にいる森田ミツという他者であり、ミツを通して彼の良心に呼びかけた神なのだ。

白い雪が発している「愛と慈悲にみち」た「深い光」の中に、「贋者」の男の映像が消えた。次第にその光に包み込まれ、「憐れみたまえ」「心狂える人間を憐れみたまえ」という祈りに近い言葉が一人になった勝呂の口からこぼれた。「なぜ人間が生き、なぜ人間が作られたか、知りたまえるあなたの眼に……人間は怪物とうつるのですか」というボードレールの詩が勝呂の記憶に浮かび上がってくる（一五六頁）。勝呂は

その答がわかっているはずである。人間は確かに「怪物」のように見える。しかしそれは決して人間の本質に対する最終回答ではあるまい。「怪物」になる可能性まで受け入れて、「母親のような優しさで」人を生かしてくださる神が期待しているのは、「怪物」になる可能性を自ら拒んで神に向かって立ち直るという人間の決断、苦悩しながらも、失敗しながらもなおそのような決断をし続けようとする実存的な人間、本当の人間なのだ。

おわりに

勝呂にとって、ホテルで危うく起こりそうになった「スキャンダル」は、良心・倫理・宗教の次元、つまり魂の次元並びに超越的な次元における厳しい試練であった。一つの試練を乗り越えたからといって、これから一生安泰に過ごせるとは限らない。実存するとは絶えず決断することであり、実存的人間の人生は激しい戦いの連続となるのだ。これは信仰を持つ者にとってはなおさらのことである。遠藤は処女評論「神々と神と」[25]の中で、すでにこれに関する深い認識を示している。

> 人間は人間しかなりえぬ孤独な存在条件を課せられております。したがって、神でもない、天使でもない彼は、その意味で神や天使に対立しているわけです。たえず神を選ぶか、拒絶するかの自由があるわけです。〔…〕ここにカトリック者にたいする大きな誤解の一つ「君は信仰をもち救われたから、もはやくるしみがない」は粉砕されるわけです。カトリック者はたえず、闘わねばならない、自己にたいして、罪にたいして、彼を死にみちびく悪魔にたいして、そして神に対して。

「信仰を持ち救われたから、もはやくるしみがない」というのは大きな誤解だ。「カトリック者は絶えず闘わねばならない」のだ。ここの「闘い」という言葉は、まさに〈実存〉を意味していると考えられよう。ある人の「本質」を定義するもの、例えばその人が「バイフォリア的な人」なのか「ネクロフィリア的な人」なのかを決めるのは、可能性としての〈バイフォリア〉か〈ネクロフィリア〉そのものでもなければ、パーソナリティ傾向や類型などでもなく、その人が一つ一つ具体的な瞬間に下した一つ一つの具体的な決断なのである。人間は、「自分が次の瞬間にどのような存在になるかを、そのつど新たに決断」[26]することができ、新たに決断しなければならない「実存的存在」なのだ。

勝呂はまた新たな「試練（スキャンダル）」に直面するだろう。今度は本当に「醜悪世界」に堕ちるか、それとも責任に向かって戦い続けるかはわからない。だが少なくとも、今の勝呂が〈強迫神経症〉的な状態から抜け出す兆しが見えてきたことは確かであろう。その兆しは、小説の最後に、彼が見た宗教的な夢に暗に示されている。

夢の中で、「暗い書斎」はまるで母の温かい子宮のように居心地よく、安心感を与える。そこで、「彼の心の秘密を知っていた」妻の声がきこえる。「あなたは、わたくしのそばよりも、そこがお好きなのね」、という。この言葉は明らかに、「母胎回帰」の快感か他者に対する責任かを選ぶことを勝呂に要請しているのであろう。一方は「子宮の眠り」に戻りたい衝動、もう一方は外からの呼び掛けに応えようとする意志、拮

抗し合う二つの力に正反対の方向に引っ張られ、烈しい苦しみの中、勝呂は眼が覚めた。夢の結局は曖昧だが、その意味は極めて明瞭である。「そこにいると死産になるの」という妻の呼び掛けにはっきりと示されるように、苦しくもがいても「起きて、出口にむかって」出なくてはいけないし、「糞尿にまみれ」ても闘わなければならないのだ。さもなくば、本当の人間として生まれることはできないからである。

結局のところ、出版社の斡旋で、未成年女性と一緒にホテルから出る勝呂の写真が「醜聞（スキャンダル）」として世に流されることなく、事件が一応解決された形になるが、「スキャンダル」はこれで終わるというわけではない。真夜中、遠くから電話の音がまた新たな試練を宣告しているように「執拗に鳴っている」。「根源的な悪」など様々な可能性を含む混沌の中から、人はどのように決断し、どのように他者の呼び掛けに応え、どのように他者との本当の出会いを成し遂げるのか。これらは遠藤の最後の純文学長編小説『深い河』（講談社、一九九三年）に託された新たな問題となろう。

注

（1）『国文学攷』二四九号、二〇二一年三月。遠藤とフランクルの関連性については、拙論「遠藤周作『死海のほとり』における「美しい世界」の意味―フランクル『夜と霧』を手がかりに―」（『近代文学試論』五五号、二〇一七年一二月）を参照頂きたい。

（2）人格が分裂不可能という観点は二〇世紀前半にすでに提出されたが、「人格分裂」または「多重人格障害」という精神障害が正式的に「解離性同一性障害」と改称されたのは、一九九四年に出版されたDSM-IVにおいてである。『スキャンダル』を執筆する時点で、遠藤はまだ人格は分裂可能だという考え方を持っていたのかもしれない。これは作家の限界というよりも、むしろ時代の限界であろう。

（3）この点について、フランクルは、「人格についての十命題」（『識られざる神』（佐野利勝・木村敏訳、みすず書房、一九六二年三月）に収録）において、人格が分割されることも融合されることもない統一体であり、一つの全体であることを強調している。

（4）この〈ネクロフィリア＝悪〉に関する認識の落とし穴も時代の限界によるものであると考えられよう。

（5）フロム『悪について』（渡会圭子訳、ちくま学芸文庫、二〇一八年一月）。

（6）前掲『悪について』（一六〇頁）。

（7）前掲『悪について』（一六二～一六八頁）。

（8）この点に関して、フランクルは、「善と悪は、われわれがなすべきことまたはなしてはならないことという意味で定義されるのではなく、人間に委ねられ求められている意味の充足を促すものが善と考えられ、そのような意味充足を妨げるものが悪と見なされることになるでしょう」と同じ考え方を示している。（『意味への意志』山田邦男監訳、春秋社、二〇〇二年七月、三〇頁）。

（9）前掲『悪について』（五六頁）。

（10）遠藤自身は「異邦人の苦悩」（『別冊新評』一九七三年六月）の中で次のように述べている。「モーリヤックによると、作家である限り、人間の内面――たとえばそれがどんなにきたならしく、どんなに汚れた罪の部分であっても、直視しなければならない。〔…〕キリスト者である限り、そういう汚れた部分は避けなければならないから、汚れた部分を直視するこ

とはできない。この二つは矛盾するものであり、もし彼が作家の義務を守ろうとすると、キリスト者としての義務を怠ることになり、キリスト者としての義務を守ろうとすると、作家の義務を怠ることになる。」

（11）前掲『識られざる神』（一〇四頁）。

（12）前掲『識られざる神』（一〇〇頁）。

（13）『死と愛』（霜山徳爾訳、みすず書房、一九五七年四月、一〇〇頁）。

（14）哲学的用語としての「疎外」であり、「物神化」ともいう。

（15）「かくすことで夫婦の安泰な生活が長いあいだ保たれていたと思うと、自分の今日までの人生がすべて虚偽の上になりたっている気がした」（一二一頁）。

（16）「身体的なものと心理的なものとならんで精神的なものも一つの固有の次元（であり）、〔…〕それは人間存在の本来的次元で（もある）のだ〔…〕。こうした次元の中にも神経症は根を下ろすことがある――われわれはそれを精神因性神経症という。なぜなら、道徳的な葛藤、良心の葛藤の緊張の中にまたは精神的問題の圧迫の下にある人間もまた、実存的危機にある人間もまた神経症になることがあるからである。」（フランクル『神経症Ⅰ』宮本忠雄・小田晋訳、みすず書房、一九六一年六月、二一五頁）。

（17）勝田茅生『精神の反抗力と運命／喪のロゴセラピー』（株式会社システムパブリカ、二〇〇八年三月、六五頁）。

（18）フランクル『ロゴセラピーと実存分析』（訳文は前掲『精神の反抗力と運命／喪のロゴセラピー』による）。

（19）『人格についての十命題』第八条（改訂版）、前掲『意味への意志』（一七二頁）に収録。

（20）Ex-sitere:「実存」のラテン語で、「外に立つ」を意味する。

（21）Person（人格）という語はラテン語 personare（響きわたる）に由来する。

（22）「人格は実存的なものである」（『人格についての十命題』）。

（23）前掲『識られざる神』（一六八～一六九頁）。

（24）Homo Patiens:フランクルの用語である。『苦悩の存在論』（真行寺功訳、新泉社、一九七二年）を参照。

（25）『四季』一九四七年一二月号。

（26）注（22）と同じ。

付記　〈悪〉や〈弁神論〉などについて、貴重な御意見を頂いた柳瀬善治先生に厚く御礼申し上げます。カント、レヴィナスらの理論及び吉満義彦からの影響を論議に組み込んで、より大きなスケールにおける遠藤の思想史的な検証を今後の課題にしたい。

『スキャンダル』の本文引用は『遠藤周作文学全集』第四巻（新潮社、一九九九年八月）による。

（にい　らくひ、広島大学大学院文学研究科博士課程後期在学）